

菅原道真と百人一首「このたびは」歌をめぐって

同志社女子大学 吉海直人

『百人一首』二四番
 このたびは幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに 菅家
 東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな
 (『拾遺集』一〇〇六番・『拾遺抄』)

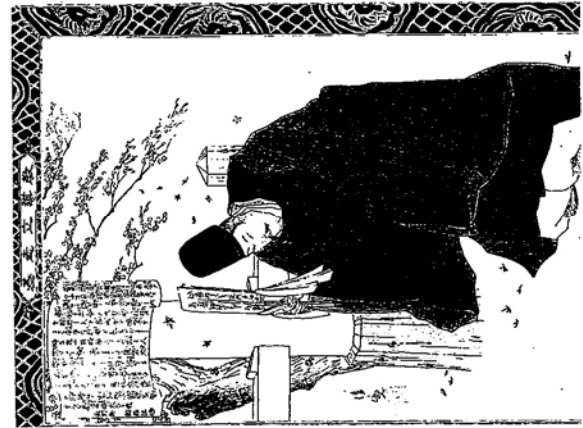
漢詩文 ←
 ままに(神主用語)
 神格化された存在

1 「菅家」作者表記について一人と神と

『古今集』『菅原朝臣』 『拾遺集』『贈太政大臣』 『新古今集』『菅贈太政大臣』

2 「手向山」所在地はどこか二三説あり

- A 東大寺境内説 (現在の手向山八幡) 北村季吟
- B 奈良山の峠 (奈良坂) 説 契沖
- C 龍田山 (河内への^{おれさか}傾坂道) 説 後藤祥子



3 「紅葉の錦」漢詩の和訓

4 「神のまにまに」祝詞の常套表現

出典『古今集』

朱雀院(宇多院)の奈良におはしましたりける時に、手向け山にてよみける

- ① このたびは幣も取りあへず手向山紅葉の錦神のまにまに (四二〇番・道真)
- ② 手向けにはつづりの袖も切るべきに紅葉にあける神や返さむ (四二二番・素性)

歌舞伎「菅原

梅は飛び桜は枯る
三つ子の梅王丸

〈昌泰元年(八九八年)十月二十三日の宮滝御幸の折に詠まれた歌〉

亭子院のならにおはしましたりける時、龍田山にて

- ③ 雨降らば紅葉の影に宿りつつ龍田の山にけふはくらさむ (『統古今集』八九八番・素性)
- ④ 紅に濡れつつ今日や匂ふらむ木の葉移りて落つる時雨は

亭子院ならにおはしましける時、龍田山にてよませ給ひける 北野の御歌となん

(『新拾遺集』一三八五番・道真)

宮滝御覽じてかへらせ給ふとて龍田山を越えさせ給うける日時雨のし侍りければ

- ⑤ 世の中にいひ流してし龍田川見るに涙ぞ雨と降りける

(『新拾遺集』一七六〇番・亭子院)

(寛平の宮滝の御幸に、在原の友于歌に)

- ⑥ 時雨には龍田の河も染みにけり唐紅に木の葉くくれり (在原友于『頭註密勘抄』巻五)

び
と
お
ら
る

満山紅葉破小機、況遇浮雲足下飛、寒樹不知何處去、雨中衣錦故郷歸（道真の漢詩）

秋の歌

⑦ 龍田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉の幣と散るらめ（『古今集』二九八番）

神なびの山をすぎて龍田河をわたりける時に、紅葉の流れけるをよめる

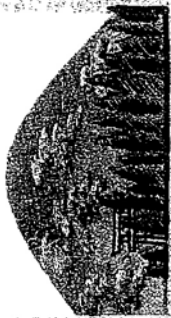
⑧ 神なびの山をすぎゆく秋なれば龍田河にぞ幣はたむくる（同三〇〇番）

⑨ あをによし奈良山過ぎてものふの宇治川渡り乙女らに逢坂山に手向け草幣取りおきて
（『万葉集』三二五一番）

⑩ ちはやぶる宇治の渡りのたきつ瀬を見つつ渡りて近江路の逢坂山に手向けしてわが越え
ゆけば
（同三二五四番）

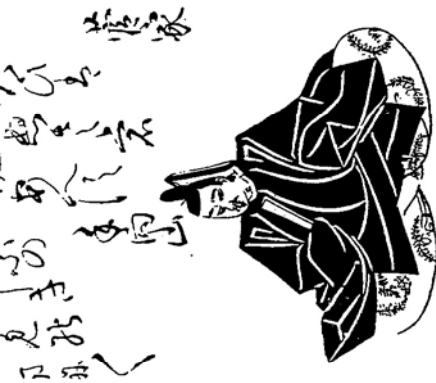
⑪ 秋萩・夏草を見て妻を恋ひ、逢坂山にいたりて手向けを祈り（『古今集』仮名序）

此の度はぬさも
取あへず
紅葉のにしき
神のまにく



伝授手習鑑

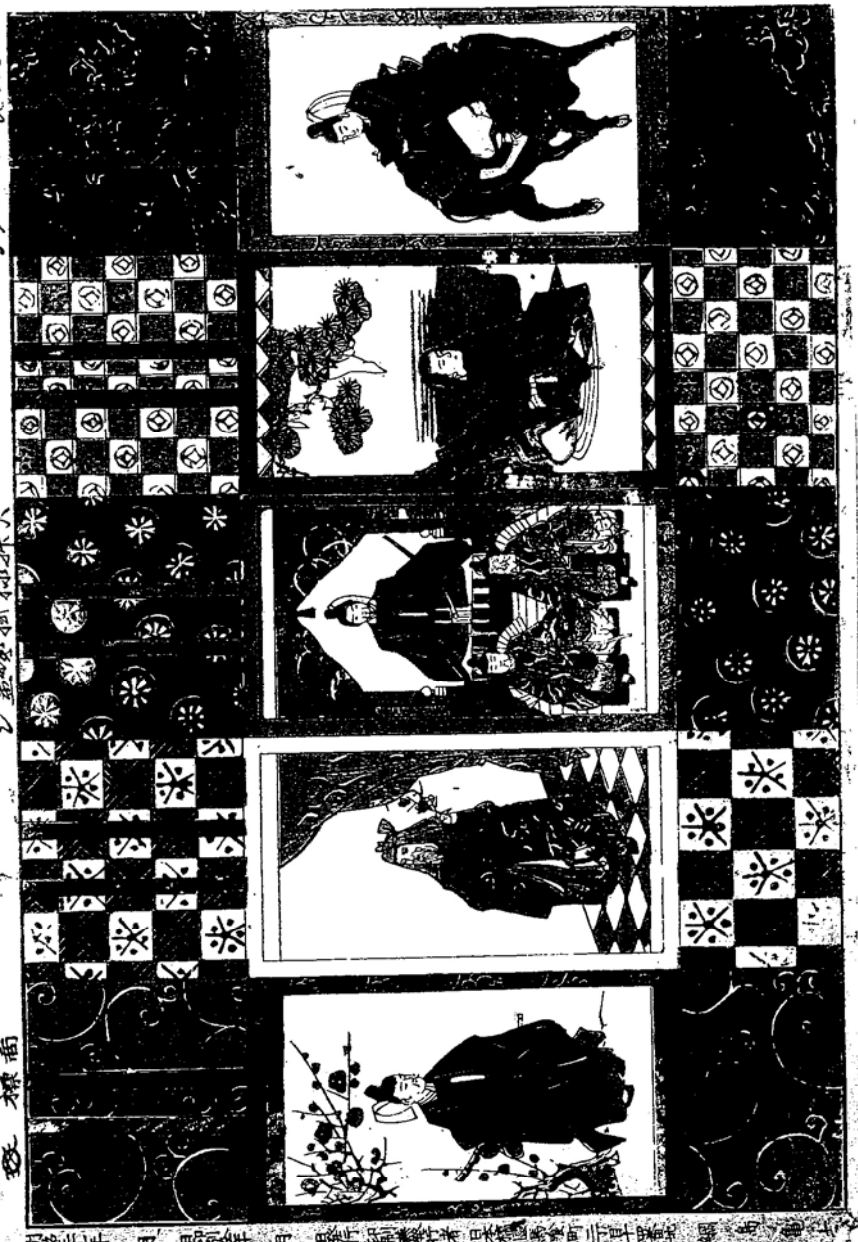
る世の中に何とて松のつれなかるらん
松王丸・桜丸 花札の役「すがわら」



ヨリロ民歌

と畫掛挿大

標商



明治五年 月 日 創刊 発行所 東京 日本橋区 本町二丁目 草堂 印刷 電話 〇〇